ハリー・ポッターと不死の咎人

カドナ・ポッタリアン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フィオラ・レシューダは不老不死の身体を持っていた。

＊のろのろ更新。

目次

プロローグ ―― 1

賢者の石

1―1 魔法使い ―― 5

1―2 思い出 ―― 16

1―3 失望 ―― 23

1―4 お気に入り ―― 30

1―5 授業 ―― 37

プロローグ

久しぶりね、適当にかけて頂戴。
コーヒーはお好き？　それとも紅茶？
あぁ、日本茶もあるわよ。最近直接取り寄せたの。この間、マホウトコロに行く機会があってね。そこで出された緑茶が美味しいのなんのって。そうだ、和菓子もあるわよ。
そう、甘い物が好きなの。私もよ。……じゃあ、二人分出すわ。
何時間くらいかかるかしら。
まぁ、確かに、私がどれくらい話すかにもよるわね。インタビューなんだし。

……。
さて、用意出来たわ。
あら、それは『自動速記羽根ペンＱＱＱ』？　懐かしいわね。昔リータ・スキーターっていう面白い女が使ってた。
……なるほど、悪い意味で有名な元記者、か。今頃、彼女はアズカバンかしら。
そう、それはデタラメ記事は書かないのね。なら安心。
私は真実を伝えに来たんだもの。変な集客効果とかを狙った記事なんて嫌いよ。
既に私が『ザ・クィブラー』の取材を受けたのは知ってるでしょ？
あれは有りのままを伝えてくれるから好き。現編集長も教え子だしね。
『日刊預言者新聞』が、かつてのように腐敗しない事を願ってるわ。君はヘタレだけど真面目だから、きっとそんな事はないと思うけど。

そうだ。
君のお祖母様はお元気？
しばらく会ってないけれど……そう！　まだピンピンしてるのね！　なら安心したわ。彼女はしぶといもの。まだ死んでくれちゃあ、

私としては面白くないわ。

……え？　何で取材を受けてくれたのかって？

まぁ……私も、色々と自分の昔話をしたがる年頃になったというか。

気を悪くしないで欲しいんだけど、元々私、日刊預言者って嫌いなの。あの事件当時は尚更。

勿論購読してはいるけどね？　魔法界の情勢を知る上では必要不可欠な存在だもの。

君は私の『お気に入り』だもの！

理由はそれだけ。

それじゃダメ？

……そう。納得してもらえて嬉しいわ。

私にとっては、あの事件はつい昨日の事のような出来事だった。

ずっと生きているからかしら。かなり時間感覚が狂うのよね。気が付いたら十年経ってる時もあるし。

けど、彼等との時間は、私の人生の中で三番目くらいに密度の高いものだったかもしれない。沢山の事件があって、沢山の人と出会った。退屈しない時間だったわ。

ええ、本当に。

そういえば……ホグワーツの決戦から、何年経ったの？

あら、もうそんなに？

……確かに皆、会う度に老けちゃってね。ホグワーツも魔法省もアズカバンも、勿論魔法界も。大きく変わったわ。私が思うに、これも歴史の一ページに過ぎないけれど。

それでも、大きな変化よね。

変化……いいえ、進歩よ。

古臭い掟や歴史はなくなった。これからは君達の番なんだからね。頑張って欲しいものよ。

教え子達は今や、魔法界のリーダー。
立派な子達。
誇りに思うわ。
君は、ホグワーツ在学中はそこまでじゃなかったけど……でも、見どころがあった。気を悪くしないで頂戴。私の『お気に入り』なんて、よっぽどよ？
授業中、分からない所があったらすぐに質問しに来て、真面目で、品行方正。仲間を大切にする、本当の意味で、素晴らしい生徒。君みたいな人間が増えたら、きっと世界から戦争はなくなるでしょうね。
君は、私の予想以上に素敵なポストに就いた。これから楽しみ。
……私、君に期待してるのよ。

……さて、閑話休題。
未来の編集長様の取材か。
少しだけ緊張するわ。何てったって、こんな事するのは人生で……
アー、意外としてるわね。ごめんなさい、今の無し。

さて、気を取り直して。

今から君に話すのは、二人の少年の物語。二人の偉大なる魔法使いの真実。
一人は憎しみの炎を燃やし、一人は闇に魅入られた。
世は彼等を悪と呼ぶけれど、私からしてみれば、皆変わらない。
皆子供で、皆魔法使いで、皆同じ種族。思想や生き方こそは違えど、皆同じ。

だから私は、傍観者ながら全てを知っている立場の人間として、君に真実を伝えましょう。
二人の魔法使いが、皆の心に留り続ける事を願いながら、君に全てを話しましょう。

ーハリー・ポッターと、トム・リドルの物語を。

賢者の石

1―1　魔法使い

ハリー・ポッターｓｉｄｅ

嗚呼、憂鬱な朝だ。

ぼやけた意識の中で、僕は狭い部屋の中で身体を横に動かす。部屋ーーとは言ったが、それはあくまでも結果論であって、実際の所、此処は階段下の物置の中だ。

壊れた傘やら、滅多に履かれない靴やら、親指サイズのフィギアが転がった狭い物置。僕としては、此処は部屋というより小屋。

外から鍵がかけられ、光源も頼りない電球一個。

寝返りを打とうにも棚に節々が当たり、身体中に出来たアザが悲鳴を上げる。オマケに録に食事も与えられていないからか、手足は木の枝みたいに細い。学校で同級生を見てみたら、年頃の少年は縦にも横にも大きい（勿論僕と比べて）。多分、僕の部屋が物置だというのも、成長が抑えられている要因の一つだと思う。

ずっと小さな服を着ていたら、身体が成長しないっていうからね。

ペチュニア叔母さんの怒鳴り声と共に、僕の一日は始まる。

朝なんて来なければ良いのに。出来る事ならば、ずっと眠っていたい。外に出たくない。

でも、ダーズリー家のいう事を利かないと、もっと酷い目に遭わされる。一週間食事がないのは、慣れたとはいえ流石に堪えるのだ。

素早く服を着替え、歪んだフレームの丸眼鏡をかけて、僕は物置を出た。

そして大きく伸びをすると、そのままリビングルームへ足を踏み入れた。

リビングに入るとまず目についたのは、王様のように踏ん反り返る豚二匹。

片方は朝っぱらからテレビゲームに夢中になっており、もう片方は膨れた手で新聞を捲っている。ちらと今朝の朝刊の見出しが目に入った『ウィンブルドン選手権が開催』……正直、興味が湧かない。

叔母さんの耳障りな金切り声が聞こえて来る前に仕事を終わらせようと、僕は眠い目を擦りながらキッチンへと入った。

「しゃんとおし！　ベーコンを焦がしたら、ただじゃ済まないんだからね！」

ほら、怒鳴ってきた。

小さい頃からこんな調子。お陰で大方の家事は一人で出来るようになったのだけれど、有難いとは決して思わない。

……何で、ダーズリー家は僕を目の敵にするんだろうか。

まぁ、理由としては二つくらい挙げられるから。

一つは、僕がこの三人の間に割り込んできた邪魔者だから。

どうやら僕の両親は、交通事故にあって死んだらしい。父方の親戚がいなかった僕は、母さんの妹であるペチュニア叔母さんの家に預けられた。

この額の傷も、その時もものらしい。僕は緑色の光以外はよく覚えていないけれどーーもしかしたらあれは、信号機の点滅、とかだったのかもしれない。

丁度その頃、叔母さんと叔父さんの間にダドリーという息子が生まれたばかりだった。どうやら何方かが妊娠し辛いｏｒさせ辛い体質だったらしく、漸く生まれた念願の息子に、彼等は喜んだ。そこに、血が繋がっているだけの僕が乱入した、という訳だ。

それが彼等にとっては気に食わなかったのだろう。

二つは、僕が何か不思議な力を持っているから。

感情が高ぶったり、怖かったりすると、いつも何かが起こった。ダドリーに追いかけられて気がついたら屋上にいたり、先生のカツラをピンク色に変えてしまったりーーこの間はダドリーの誕生日祝いに動物園に行ったら、ニシキヘビのケージのガラスが消えて、僕はそい

つと話せてしまった。あの時は一週間も食事を抜かれて……成長期だってのになぁ。
ダーズリー家は、〝マトモ〟が大好き。
マトモな人間であり、マトモな生活を送り、マトモに人生を全うする。そんな退屈な生活を望んでいるのだ。
だから彼等は、僕を嫌った。
もし僕に変な力がなければ、彼等は普通に接してくれただろう。
何故なら、甥を寄ってたかっていじめるのは「マトモじゃない」から。……そう、僕にこんな力がなければ良かったんだ。
彼等は僕がマトモじゃない事を理由に、その他諸々の恨み嫉みをぶつけている。随分と常識的な一家だよ、本当に。
まぁ、僕はダドリーみたいになりたい訳じゃないけどね。
……お腹一杯ご飯を食べて、温かいベッドで寝られる。それだけで良い。それだけできっと、僕は幸せだと思う。

ベーコンエッグを三つのトーストの上に乗せ、皿と一緒に運ぶ。僕の朝食はベーコン一枚に、豆三粒。まぁ、食事抜きよりかはマシさ。
「おいハリー、郵便を取ってこい」
「はい、叔父さん」
嗚呼、忌々しい。
心の中で悪態付きながら僕は家を出て、ポストに入った郵便を全て抜き取る。
叔父さんの妹からのハガキ。
近くのピザ屋の宣伝チラシ。
電気代の請求書ーーあれ、これは何だ？
黄色がかった羊皮紙の封筒。切手はない。
紫色の蝋印が押してある。
そしてエメラルド色のインクで書かれた宛名にはーー
『サレー州　リトル・ウィンジング

プリベット通り四番地　階段下の物置内
ハリー・ポッター殿』

心臓を誰かに掴まれたような感覚に襲われた。
怖いーー純粋にそう思った。
誰が僕に手紙を送ったかなんて関係ない。ただ、ダーズリー家しか知らない僕の寝床を、この手紙の差出人は知っている。
警察？　スパイ？　それとも殺し屋か何か？
全く心当たりがない。
でも、この分厚い封筒の中に何かが入っているのは確かだった。
どうしようーー開けるべきか。それとも捨てるべきか。
叔父さん達に見せようかーーそうだ。そうしよう。僕に手紙を送るなんて酔狂な輩はいまい。もし悪戯なら、僕ではなく叔父さん達に被害あった方が良いというものだろう。そもそも、得体の知れない手紙を開けるなんて馬鹿げてる。
爆弾でも入ってたら良いのに。

そんな些細な、けれども有り得ない願いを胸にしまいながら、僕は自分宛の手紙に気がつかなかったフリをして、纏めて叔父さんに渡した。

「マージが病気だよ。腐りかけの貝を食ったらしい」
ザマァみろ。
マージは嫌いだ。時々この家に遊びに来てはダドリーばかり可愛がり、無駄に不細工な犬共を連れてきて僕を襲わせる。何度あいつらに噛まれた事か。マージが来た時の唯一の救いは、庭にあるあの大きな木か。
あれに登っていれば、犬達も豚達も追っては来れない。
しばらくベーコンを口の中で味わいながら叔父さんの顔を見ていると、見る見る内に顔色が悪くなっていくのが見えた。

「ペ、ペ、ペチュニア!!」
テーブルを大きく揺らしながら立ち上がり、叔父さんは僕の手紙を持ってガタガタと震え始める。追い打ちをかけるように、僕は笑いながら言った。
「あぁ、僕宛の手紙があったんだけど、どうして良いか分からなくて。叔父さん、それが何処から来たのか知ってる？」
「あ、こっ、これは……あぁ」
「あぁバーノン、どうしましょう……貴方！」

＊＊＊

その後、半狂乱になった二人に僕とダドリーは追い出された。
どうやら叔父さんと叔母さんは、あの手紙の差出人に心当たりがあるらしい。僕は差出人に興味があった。あの二人が青ざめていたのだ。相当な相手に違いない。その考えはダドリーにもあったらしく、二人して聞き耳を立てた。
見張っている、返事を書かない、ああいう連中、危険なナンセンス……よく意味が分からない。
ダドリーもそうだったようで、仕方なく物置に戻る事にした。

その後、色々な事があった。
幸運だったのは、僕の部屋が物置から二階の寝室にグレードアップした事。この家の中では一番小さい寝室だが、物置よりマシだ。
それにベッドもある。
これっきりは、あの手紙の差出人に感謝しなきゃ。

しかし部屋を変えても、変わらず手紙は届く。
僕は何とか手紙を手に入れようと様々な手段を試したが、叔父さんの妨害により悉く失敗。そんなに躍起になって手紙と僕の邪魔をするものか？　そんなに見せたくないなんて……やっぱり気になる。

そして、手紙が届いてから一番最初の日曜日。
今朝も手紙の嵐が来ると待ち構えていたが、それは来なかった。叔父さんは「日曜は郵便局は休みだからな！」とワイン片手に高笑いをしていたけれど、牛乳瓶や卵パックの中にまで手紙が仕込まれていた時点で、確実に郵便局の仕業ではない事が分かるだろう。
やっぱり、政府の特別な機関か何かかな。全く心当たりはないけど、そうじゃなきゃ、こんな芸当出来ないだろうし。悪戯にしては手が込みすぎてる。
まぁ、ダーズリー家のノイローゼが面白いから、僕としては喜ばしいのだけれど。

そんな日曜日。
夏に入りかけで肌寒い、夜の七時。
ダーズリー家がテレビ鑑賞をしている後ろで突っ立って、僕もテレビを観ていた。すると、ピンポーン、といつものチャイムの音が鳴る。
しかし、ドアは釘で打ち付けられて開かない。
叔母さんは宅配便だと思ったのか、ドア越しに「窓から来てください」というと、再びリビングに戻ってきた。
僕はボーッとしながら、リビングの窓を見つめる。
そろそろ暗くなってきた。
ーーと、思った瞬間、長い髪のシルエットが窓に映り込んだ。
宅配便じゃない。あれはーー

訪問者は何の断りもなく窓を開けると、リビングルームの中を一瞥して、そのまま乗り越えて中に入ってきた。
青みがかった綺麗な黒髪に、黒い瞳。
成人する直前にも見える容姿を持った訪問者は、黒いローブを翻しながら、リビングの床に着地した。皆、呆気にとられたまま、彼女の姿を見つめる。
美しすぎた。
長い睫毛も、艶やかな唇も、大きく宝石のように輝く瞳も。

異様な姿でありながらも、彼女に皆が目を奪われてしまった。プリベット通りに静寂が蔓延していたように感じる。僕の耳に入るのは、風の音と、テレビから流れるコメンテーターの笑い声。
そして透き通るような声で、彼女はこう言った。

「フィオラ・レシューダ。ホグワーツからの使者です。手紙を送ったつもりだったのだけれど、あまりに音沙汰がないもので……返事を貰いに来ました」
「ほ、ホグワーツ……？」
そういえば、あの手紙の蝋印の真ん中には〝H〟と書いてあった。
まさかあの手紙は、ホグワーツという何かからのものなのか？
すると叔父さんは正気を取り戻したようで、暖炉の上に飾ってあった猟銃を手に取ると、フィオラと名乗った彼女に向けた。
「す、すぐにお引き取り願おう！　これは歴とした犯罪だぞ！」
「あぁ……まぁ、そうよね。でも、銃を手に取るのはフェアじゃないわ」
彼女は懐から杖のようなものを取り出し、叔父さんに向かって杖を振った。
すると銃がグニャリと曲がり、叔父さんは驚いて腰を抜かす。僕やダドリー、叔母さんも勿論驚いた。杖を振っただけで銃を曲げるなんて、人間の為せる技じゃない。
「こっちだって、ご近所に見られないように気を使って夕方に来たんだから、少しくらい歓迎してくれても良いと思うんだけど。窓から入ったのじゃ謝るわ。でも……ドアを封印してるのもどうかと思うの」
そう、冗談っぽく言う。
「……で、ハリー・ポッターは……あぁ、君ね」
すると彼女は僕に歩み寄ると、今度は優しく微笑んだ。
「お父さんにそっくり。でも、目はお母さんね。君を見たのは初めてだけど……ええ、聞いていた通り」
「あの……貴女は、僕の両親と知り合いなんですか？」

「えぇ。教え子よ。私はホグワーツの教師なの。歴史を教えてるわ。あぁそうそう、私の事はフィオラって呼んでね」
「教師にしても、若いような……」
「色々あるのよ」
　どうやらフィオラは僕の両親の先生（？）らしい。けど、まだよく分からない。
　ホグワーツが何なのか、何故彼女がこんなにも若いのか。僕は纏めて聞いてみる事にした。
「ほ、ホグワーツって……何なんですか？」
「あら。叔父さん達に聞いてない？」
「いえ。全然」
「……ふぅん」
　僕の言葉を聞いて、フィオラは目を細める。非難の目だ。その視線にダーズリー家はビクッと身体を震わせる。
　気がついたら、彼等は部屋の隅に固まって肩を寄せ合っている。フィオラからは敵意を感じないが、まぁ、得体の知れない人物という時点で警戒対象なので、仕方あるまい。
「手紙を受け取ってないって言うのはダンブルドアから聞いていたけど、まさかホグワーツの事も知らないなんてね……って事は、君は自分の両親についても何も知らないのか。……失望したわ、ペチュニア」
「ヒッ……！」
「ダンブルドアからの手紙を読まなかったの？　しっかりと、この子が何者かについてを教えておくように言われていた筈よね」
「わっ、私は……」
　フィオラの気迫に押されたのか、叔母さんは泣き始めた。いつものあの強気な態度からは考えられない姿だ。フィオラは、叔母さんとも知り合いなのか？　それにダンブルドアって？
　先程から疑問が尽きない。
　すると、僕の心を呼んだのか、フィオラはいっぺんに答えた。
「私はペチュニアとは初対面よ。名前を聞いていただけ。ダンブルド

アはホグワーツの校長で、最も偉大な魔法使いと言われている」
「ま、魔法使いだって……？」
「えぇ」
さも当然のように、彼女は言い放った。
叔父さんの顔が更に青くなる。
ーー魔法使い。
あの、杖を使って魔法を使ったり、変な薬を作ったり、猫を使い魔にしたりするあの魔法使い？　そんな、まさか……いや、でも……僕の周りには今までに、色々と変な事もあった。
「客人！　それ以上口を開くな!!」
『シレンシオ　黙れ』……よし、これで落ち着いて話せる」
「あの……叔父さんに何をしたんですか？」
口をパクパクさせているが、全く声が出ないようだ。何かの魔法だろう。
「声を出させなくする呪文。……さて、続きを話すわよ」
それから彼女は、全てを話してくれた。
両親ーージェームズ・ポッターとリリー・ポッターが優秀な魔法使いと魔女であり、僕は彼等の息子だという事。
ホグワーツに行けば、僕も両親のような素晴らしい魔法使いになれるという事。
そして、僕と両親が有名だという事。
どうやら僕は、ヴォルデモートとかいう闇の魔法使いに殺されそうになり、生き延びたらしい。これまでヴォルデモートにターゲットにされた魔女や魔法使いは皆死んだ。唯一その人から逃れる事が出来た人物は、僕一人だけだという。
そして僕の両親は、ヴォルデモートに勇敢に挑んで、殺されてしまったらしい。
「概要はこのくらいで良いんじゃない？　もっと詳しい事は、本を読めば良いと思うわ」
「ぼ、僕はそれじゃあ……」

「『生き残った男の子』。皆がそう言う。しばらくは大変ね。君のファンは沢山いるの。それとハイ、これ」
フィオラに手紙を渡された。
僕が手に入れたくて仕方のなかった手紙だ。
黄ばんだ羊皮紙。そして紫色の蝋印。満を持して開けると、そこには数枚の紙が入っていた。

『親愛なるポッター殿
この度、ホグワーツ魔法魔術学校に入学を許可されました事、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。
新学期は九月一日に始まります。使者のフィオラ・レシューダに、入学するか否かの返事を伝えてください。
敬具
副校長ミネルバ・マクゴナガル』

心の底から、大きな喜びが溢れ出てきた。
僕が魔法使いーーそれに、此処から離れられるんだ。それに、両親は偉大な魔法使いだったという。
フィオラの話が本当かなんて、これまでの一連の言動を見れば分かる。
何処の世界に、銃を杖の一振りで曲げたり、バーノン叔父さんの声を無くしたり出来るマジシャンがいる？　否、存在する訳がない！
「……で、どうする？」
「入学します。僕は……魔法使いなんですよね」
魔法使いになれば、ダーズリー家を見返せる。
今までされてきた事の仕返しだって出来るんだ。だから僕は、ホグワーツに行きたい。
「えぇ。それも将来有望な、ね。楽しみだわ。私、分野は関係なく、優秀な人間が好きなの。期待してるから」
「はぁ……」

フィオラは再び杖を振る。
すると杖先から何か青白い光の筋のようなものが現れ、それは豪奢の鳥を形作った。尾は長く、クリリとした大きな目を持った鳥。こんな生物見た事ない。
「ダンブルドアに、『ポッターが入学する事になりました』って伝えて」
鳥は頷くと、そのまま開いた窓から飛び出していった。
今の魔法は何なんだろう。
「『守護霊の呪文（パトローナス・チャーム）』。守護霊は人によって違うの。幸福な瞬間を思い浮かべて詠唱すると、守護霊が現れる。君もいずれ使えるようになるわ」
「あ、あの……僕はこれからどうしたら」
「一先ず、『漏れ鍋』に行きましょ。本当はもっと早くに来たかったんだけど、他の新入生の案内に時間がかかっちゃってね。一晩だけ宿に泊まってもらうわ。お金は出すから」
「あ、ありがとうございます……」

そろそろプリベット通りにも、暗闇が満ちる。
日が着々と沈み、そして月が昇ってきた頃。僕はフィオラの手を取り、ロンドンへ姿をくらました。
魔法使い。
魔法界。
ヴォルデモート。
そしてホグワーツ。
嗚呼、なんて清々しい夜なんだ。

1―2　思い出

フィオラ・レシューダｓｉｄｅ

ポッターの買い物が終わり、無事プリベット通りの家に帰した後、私はすぐさまホグワーツに戻った。

守護霊を送ったからダンブルドアに事は伝わっているとは思うが、まさかダーズリー家があんなに魔法族を拒否する部類だったとは。魔女狩り時代並みの拒絶だったわね、あれは。随分とポッターが細いから、一家に開心術を使わせてもらったら、酷いいじめが行われていた事が判明。こりゃあホグワーツに来たくもなるわね。

まぁ、あのダドリーって男の子も、それなりに虐待を受けているように感じるけど。あそこまで甘やかされるなんて、ある意味一番酷いとも思わない？

私だったら絶対にお断りよ。

ただ一つ、懸念な事が。

ポッターに〝開心術が使えなかった〟。

二千年近く生きてきて開心術もその間に鍛えたけれど、あんなにもレベルの高い閉心術師には会った事がない。それも、まだホグワーツに入学していない子供。

恐らくは、これまでずっと虐待やいじめを受けてきた事によって、無意識に周りの人間に心を閉ざしているのでしょうね。可哀想に。

まぁ、ホグワーツに来ればある程度子供らしくなるでしょう。

あそこには同年代で、同じ種族の子供が沢山いるし、ポッターは魔法界の英雄って言われてるのよ。敬遠はされるかもしれないけど、友達くらいは出来るはず。

私はホグワーツ内でも姿現しが出来る。

本当は校長にしか出来ないように魔法がかけられているのだけれ

ど、私はホグワーツの創設に立ち会った。どんな魔法かは知っている。
校長室へ向かうと、ガーゴイルの銅像が見えた。お菓子の名前になっている合言葉を言って、中に入る。
「ダンブルドア、終わったわよ」
「おぉ、フィオラか。どうじゃった、ハリーは」
そうして私は、ダンブルドアに事の顛末を話した。
仕事終わりで精神的に疲れてるんだけど、これで新入生の案内も私は終了だから、今夜はゆっくりと休もう。そうね……禁書の棚から数冊家に持って行こうかしら。
闇の魔術の研究を進めないと。
今は、「死の呪文」の反対呪文を研究してるのよ。
まぁ、流石にそうホイホイ人を蘇らせるって訳にはいかないから、それなりに手順を踏まないといけない魔法にしなくちゃだけどね。
私の話が終わると、ダンブルドアは嬉しそうに頷いていた。
「ほうほう。なるほど」
「今年のマグル生まれは、全員ホグワーツに入学するみたい。ホグワーツに行かなかったマグル生まれは……今までに数人いたわ」
「フィオラは、今年で何年目かの？　わしが学生だった頃はまだいなかったが」
「七十年近くいるわね。此処には」
私が手招きをすると、不死鳥のフォークスが飛び近寄ってくる。
赤い羽を持った美しい鳥。私も以前、不死鳥を飼っていた。彼等は親しくなれば、大きな利益を私達に与え、そして、良き友人として助けてくれる。私が不死である所以も、不死鳥にある。
フォークスは一体、いつから生きているのだろう。
少なくとも、私より年下ではなかろう。もっと昔から、ずっと生きているはずだ。
「そうじゃフィオラ。『賢者の石』は取ってきてくれたかの？」
「えぇ。はいこれ」
そう言って私は、懐から小さな袋を取り出し、ダンブルドアに渡す。

賢者の石ーダンブルドアが、ニコラス・フラメルから預かったものだ。何やらこれを狙っている輩がいるようで、ホグワーツで守る事になったんだとか。ニコラスとはこの間会ったけど、随分と元気そうだったわ。まぁ、結構なご老人に見えたけどね。

石を狙っているのはヴォルデモートなのでは……というのがダンブルドアの推測。

まぁ、ダンブルドアがいるんだったら平気でしょうけどね。

「ありがとうフィオラ。……そうそう、四階右側の廊下を封鎖して、そこにハグリットの持つ三頭犬を起き、その奥に賢者の石を守るトラップを作るつもりなんじゃが……」

「手伝えって言うの？　そうねぇ……どうしようかしら」

私にメリットがないじゃない。

それに、トラップって言ったって、私が作ったら相当えげつないものになるけど？　それでも良いの？

「わしが通れる程度にしてくれるとありがたい」

「じゃあ、石を守る最終段階の魔法をかけるわ。それなら君も辿り着けるんじゃない？」

「では、そうしてもらおう。詳細は追って伝える。しばらくは、ゆっくり休んでいてくれ」

「了解。じゃ、私は帰るわ。図書館の禁書から数冊持っていくけど良いわよね」

「勿論」

ダンブルドアの了承も貰ったので、図書館で姿現しをし、目星をつけておいた本を抜き取って、家に帰った。

＊＊＊

私の家は、イギリスのずっと北の方の山奥にある。

誰も知らない深い森。

マグル避けと認識妨害の魔法を余す事なくかけているから、今までに訪問者はあまりない。ただし、ふくろう便だけは届くようにしてい

る。じゃなきゃ、外部と完全に切り離された陸の孤島状態になっちゃうもの。新聞も読みたいしね。
日刊預言者は好きじゃないけど、まだ嫌いでもなかった。
大した事件がない限りは善良なマスメディアだし、時々嫌な記事を書く奴もいるがーー大方そういう人間は部署内でも好かれていないのだろうーー小見出しでちょこんと載っている程度。だから、気にはならない。
魔法省からの手紙は、会合や発表会の招待が多い。他にも新しい魔法具の依頼や魔法生物の討伐等。この頃は随分と手紙の頻度が減っているけど、何か理由でもあるのかしら。

森の中にある一番大きな湖の横に、私の家はある。
空間拡張の魔法をかけているお陰で、端から見ればよくある山小屋だが、中に入れば必要空間の揃った広いお屋敷だ。
家の裏では野菜と果物を育てており、よく釣りもする。その他生活必需品や細かい調味料等は、森を抜けた町で買えば済む。
半サバイバル状態で生きているものの、此処に戻ってくるのは、夏休みの期間だけ。だから、魔法省に屋敷しもべ妖精はいらないかって言われた時は、断ったのよね。
「あら、ふくろう」
家の屋根の上に、一羽のふくろうが止まっていた。
茶色い小さなふくろうだ。足には手紙が括り付けられており、私の姿を視界に捉えると、小さく羽を揺らして飛んでくる。
足から手紙を外し、宛名を見た。
「聖マンゴから……何かしら」
ふくろうを連れ、私は中に入った。
ごちゃごちゃとした家の中。
私が入ると明かりが付き、その荒れ具合がさまざまと目の前に映し出される。沢山の羊皮紙は机から落ちて床に散らばり、薬草や魔法生物の身体の一部が天井からぶら下がっている。状態保存の魔法がかけてあるから、腐る事はない。見た目は悪いけどね。

暖炉の横にある麻袋の中からふくろうフーズを取り出し、私は聖マンゴのふくろうに与えた。お腹が空いていたのだろう。美味しそうに食べている。

さて、手紙の内容だがーー「前例のない病気が見つかったので、レシューダさんの意見を聞かせて欲しい」との事だった。

手紙にはその患者の写真と、症状が添付されている。

……なるほどね。

患者の身体中には、沢山の目玉が付いていた。

顔には変わらず二つだけだが、腕や足、腹にまで目がある。曰く、視界が大きく広がったようだが、元に戻したいとの事。原因としては、視力を良くする魔法薬を作っていたら失敗した……との事。

いや、確かに初めて見た。

それにしても、視力向上の魔法薬は、結構難易度が高かったと思うんだけど……それに失敗したのか。魔法薬作りは危険が伴うからね。

私は近くの魔法薬貯蔵用の棚を開けて、中から緑色の液体が入った瓶を取り出した。

そして羊皮紙をひっつかみ、雑な字で返事を書く。

『強力な全魔法薬無効化の薬を持たせました。レシピも一緒に送ります。それを患者に飲ませて一週間安静にさせてください。フィオラ・レシューダ』

「ふくろうさん、そろそろ良いかしら」

ホー、と一鳴きすると、慣れた様相で足を差し出してきた。

魔法で括り付けると、窓から飛び立たせる。

「さて、本でも読むか」

その前に片付けをしなければならないかもしれないが、私にとっては、この汚さが落ち着きを呼ぶのである。

以前、訪問者がやってきた時は、勝手に魔法で掃除をされた。
初めての客人であり、私の教え子でもあったので、快く迎え入れ、紅茶でも淹れてやろうと思ったのに……あの子ったら、「こんな場所で落ち着いて話が出来るか」なんて言って、魔法で片付け始めた。
私からしてみれば、自分のテリトリーが荒らされた訳であって非常に悲しかったが、まぁ、普通の反応だろう。
……彼、今もきっと生きてるんでしょうね。
あの時は片付けられた腹いせに、彼の「自分の陣営に来てくれ」って話を断ったけど……もしかし、根に持ってたりするかしら？
まぁ、今度会ったらゆっくり話でもしたいわね。
あの子もートムも、私の『お気に入り』の一人なんだから。

暗黒時代真っ只中。
流石にホグワーツに来ようとは思わなかったみたいね。長期休暇で私が家に帰っているであろうタイミングを見計らって、彼はやってきた。
勿論、私の家を見つけたからには歓迎してあげようと思ってね。ダンブルドアは知ってるけど……入り方やトラップはランダムになるから、中々此処には辿りつけまい。
そんなルナティックパズルを見事クリアしたのがトム！
いやぁ、彼は昔から本当に優秀な生徒だったけど、大人になってからは更に磨きがかかったわね！
でも、容姿が随分と変わっていたのには驚いたわ……分霊箱（ホークラックス）ですって。無茶な事する子ね。
学生時代もよく私に「不老不死」の事を聞きに来てたけど……まさかそんな馬鹿げたものに興味を持っていたなんてね。
腹黒くて計算高いのも変わってないけど。
でも、分霊箱はまだ良いわ。
何てったって、私と違って、完全な不死ではないんだもの。
だから私は、トムが少しだけ羨ましかった。

本当に死を克服しても、得るのは孤独だけ。

「懐かしい……」

五十年前のホグワーツ。

いずれ巨悪な闇の魔法使いになろう少年が起こした事件により、一人の女子生徒が命を落とした。私は秘密の部屋を開けたのがトムだって知っていたけど……あえて口を紡いだわ。何故かしらね。私は、彼の危険性をダンブルドア同様知っていたのに。

生徒が死んだのは、本当に悲しい出来事よ。

私も教師の端くれだもの。守れなかった自分を悔いたわ。それに、ハグリットという、事件には全くの無関係な彼が罪を着せられたんだもの。

けど……私はトムが『お気に入り』だったから。

私、自分の気に入った人間は守りたくなるの。例えそれが、どんな人間であっても。

だから彼は、わざわざ時間をかけてまで私の所に来たんだわ。明らかにダンブルドアに付いているであろう、私の所に。彼は私が自分に与してくれると思ったに違いない。

私は戦闘力は高くなくても、その他の能力が高い。新しい魔法や薬を作り、時には命の想像という神の領域にまで手を出す。

あの時は怒っていたから断ったけど……もしトムが家の掃除なんてしなければ、どうなったかは分からない。

いつか彼は復活する。

その時私は……誰に味方しようかしら。

1―3　失望

ロン・ウィーズリーｓｉｄｅ

僕は純血の家に生まれた。

聖２８一族という、確実に純血だと言われる一族の中に、ウィーズリー家もある。他にも純血を名乗る魔女や魔法使いはいるだろうけど、やっぱり途中でマグルが入ったり、半純血の者も多い。けど僕は別に、純血である事を誇りには思わない。

他の連中はーー特にマルフォイ家を筆頭にーーマグルやマグル生まれを見下す『純血主義』っていう古臭い考えを持っているんだ。僕の家族はそれを酷く嫌っている。僕はそんな連中と同じ純血だという事に、あまり良い気持ちを感じられない。

僕の家は貧乏だ。

何たって、息子が僕を合わせて六人、娘が一人の、合計して九人の大家族だ。

父さんは部長をしているけど、二人しかいない極小部署で、給料も決して高くはない。本当はもっと上のポストに就けるはずなのに、父さんったらマグル製品が好きだから、今の部署が良いんだって。

でも、僕の上の兄弟は凄く優秀で、ビルやチャーリーは家に仕送りをしてくれる。お陰で随分と家計が楽になったと、母さんが嬉しそうに言っていた。

パーシーは主席。

フレッドとジョージは悪戯好きだけど、やれば出来るし、グリフィンドールで一番の人気者だ。オマケにクィディッチも上手い。

ジニーは唯一の女の子という事で、両親に格別に可愛がられている。僕から見ても可愛い妹だ。

けど、僕は何もない。

大して頭が良い訳でもない。クィディッチの才能もない。人に悪

戯をして笑う度胸はない。イケメンでもない。魔法の腕もそこそこ。
優秀で突飛な兄達の中で、僕だけが劣等生だった。
だから僕は嬉しかった。

ハリー・ポッターという英雄が、同じコンパーメントにいる事が。

「やぁ、僕はハリー・ポッター」
そう言って、僕に手を差し出すハリー。
小さな笑みを浮かべてはいるものの、その目は冷たく、笑っていない。
けどこの時の僕は、そんな些細な事を気にするような精神状態ではなく、ただ、「例のあの人」を倒した英雄との対面に、心が大きく高揚していた。
楽しみにしていたホグワーツ。
汽車で初めて会ったのがハリー・ポッターだなんて、僕は夢にも思わなかった。今年入学する、みたいな話は少しだけ聞いていたけど、まさか本当に会えるなんて。
僕は自然と緩む口元を押さえながら、ハリーの手を取った。
嬉しかった。
兄達は優秀だが、僕はその代わりに、英雄と一番に友達になれたんだ。こんな光栄で、素晴らしい事はあるか！

どうやらハリーは、マグルの家で育ったらしい。だからこの間まで、自分が何者であるのかを知らなかったんだとか。しかもその育て親のマグルが相当意地の悪い連中だったようで、ハリーは彼等をあまり良く思っていないらしい。まぁ、当然だよね。
ハリーは笑わないし、冗談も言わないし、表情が全く読めない。
けど、良い奴だってのは確かだった。
僕の家族やクィディッチの話を興味深そうに熱心に聞いてくれたし、愚痴にだって付き合ってくれた。多分、感情が希薄なだけなんだと思う。まぁ、今まで酷い扱いを受けてきたんなら、そうなっても仕

方ないよね。
そう思ったら、幾ら英雄でも、やっぱり人間なんだなって感じるよ。
それから、車内販売のおばさんが僕達のコンパーメントにやってきた。
ハリーは山盛りのお菓子を見て少しだけ目を輝かせ、全種類を数個ずつ買っていた。あんなにお金があるなんて羨ましいな。
僕は母さんから渡されたコンビーフのサンドイッチを食べるつもりだったけど、ハリーがお菓子を一緒に食べようとするので、その好意に甘える事にした。こんな数と量のお菓子を食べるなんて……ハリーとも友達になれたし、今日は一年の中でもかなり幸運な日かもしれない。

「あ、この人、僕を迎えに来た人だ」
蛙チョコレートのカードを見ながら、ハリーが小さく呟いた。
迎えに来た人？　ホグワーツの人かな？
「名前は？」
「フィオラ・レシューダ」
「あー、『不死者』か」
僕は五枚くらい持ってる。
『不死者　フィオラ・レシューダ
二千年以上前に生まれた、知識欲旺盛な偉大な魔女。不老不死の力を持つ。近代ではホグワーツで魔法史の教授として働いている。独自の魔法を構築し、逆転時計や闇浄化魔法、完全呪詛対抗薬、完全脱狼役等、沢山の発明が彼女の研究の産物として生まれてきた。彼女の残した功績は多い』
凄く綺麗で、若い魔女だ。
不老不死って事は、きっとその容姿も魔法によるものなんだろうけど、それでもやっぱり綺麗な人には変わりなかった。
ーーそうだ。
この間パーシーが言っていた。
「彼女の魔法史は教科書以上の事を学べる。是非真面目に受けた方が

良い」って。フレッドとジョージも珍しく、フィオラ・レシューダの授業は好きなようだ。
だから歴史が好きなジニーが、ホグワーツに入学するのを非常に楽しみにしていた。
ダンブルドアレベルの知名度を誇る魔女。
そんな人に会ったのか……凄いな、ハリー。

「やっぱり不老不死なんだ」
「どうやってなったのかな？　やっぱり、オリジナルの魔法か何か？」
「さぁ……？」
フィオラ・レシューダは、綺麗な顔でこちらに微笑みかけてくる。
思わずドキリとしてしまうが、すぐに写真の外に出て行ってしまった。ハリーは写真が動いた事に驚いていたけど、僕からしてみれば、動かない写真の方がずっと奇妙だよ。

それから、ヒキガエルを探す同じく新入生の男の子が来たり、僕が魔法をかけようとしたら、栗毛の嫌味な女が来たりした。
そろそろ着替えないとな……とボンヤリ思っていると、立派なシルバーブロンドを中心とした三人組が、本日三組目のコンパーメント乱入者として現れた。
「このコンパーメントにハリー・ポッターがいるって聞いたけど、もしかして、君かい？」
「うん、そうだけど」
変わらない無表情。
ハリーは緑色の冷たい目を、三人に向けている。スキャバーズは相変わらず菓子を貪っている。こんな時に、空気の読まない奴め。
コンパーメントの外が騒がしいのは知っていた。
大方、あの栗毛の女が言いふらしたんだろ。ったく、チラチラとこの中を覗く人はいたけど、入ってきた奴はこいつらが初めてだ。
「僕はマルフォイ。ドラコ・マルフォイ」
「ふっ」

思わず笑ってしまった。
いやいや、マルフォイって言えば、純血の名家（笑）じゃないか。そう、純血主義の台頭。ルシウス・マルフォイっていう現家督は、元死喰い人。そんな家の人間がハリーに会いに来るなんて、馬鹿げてる！
「僕の名前がおかしいか？　お前の名前は聞くまでもないね。赤毛に、お下がりのローブ……ウィーズリーの家の子だな」
「だから何だよ」
「ポッター君、付き合う人間は選んだ方が良い。ウィーズリー家は血を裏切る一族だ。君は、こういう人間と一緒にいるべきじゃない」
「……」
ハリーは何も言わない。
「誰が下賤な輩かっていうのは、普通の人間じゃ見分けが付けにくい。僕が教えてあげよう」
するとマルフォイは、ハリーに対して右手を差し出した。
勝ち誇ったような表情で、僕に見せつけるように。
まさか！　ハリーがこんな奴の手を取る訳がない！　僕はそう思ってハリーを見たが、彼はその手を見て戸惑っているように見えた。
そして数秒考え込み、やがてこんな結論を口にした。
「自分の友達は、自分で選ぶよ。でも、仲良くしようね、ドラコ」
そう言うと、マルフォイの手を取って、小さな笑みを浮かべた。
少々複雑そうな顔をしたマルフォイだが、どうやら今の言葉で満足したようで、部下の二人を連れてコンパーメントを去っていった。
ハリーはまた百味ビーンズを食べ始めたが、僕は唖然としていた。
きっとハリーなら、あんな奴の手を取らず、拒絶すると思っていた。純血主義の友達になんて、絶対になろうとしないと思っていた。それに、マルフォイ家はウチの天敵だぞ？
……あぁ、そっか。
ハリーは知らないんだ。マルフォイ家が皆、根から腐ってるって事を。

教えてあげなきゃ。君が間違った人間の手を取ったって。
あいつこそが、魔法使いの恥なんだって。

そう思いながら、僕はハリーに彼等の悪事を話し始めた。
スリザリン寮生の邪悪さや、醜い純血主義、あいつらがどれだけ腐っているのかを。

＊＊＊

「グリフィンドール!!」

声高々に響き渡る組み分け帽子の声。
そして、獅子寮のテーブルから響き渡る歓声と拍手。盛り上げ役はフレッドとジョージかな。凄い周りを煽ってるよ……。
ホグワーツにつき、湖を渡って大広間へ。
組み分けの儀式は「痛い」とか聞いていたからかなり不安だったけど、実際は帽子を被るだけで本当に良かった。
どうやらあの帽子は、ホグワーツの創設者達が魔法をかけ、被った人間をふさわしい寮に選んでくれるらしい。
ハッフルパフになるかも……と少し心配だったけど、やっぱり血筋かな。両親や兄達と同じ、勇気のグリフィンドールに僕は入寮出来た。
憧れのグリフィンドール。
僕の胸は、喜びで一杯だった。
「我が弟よ!」「ようこそ、グリフィンドールへ!」
笑顔で、嬉しそうに、僕を迎える皆。
組み分け帽子が、僕に「勇気がある」と判断してくれたんだ。それが嬉しくてたまらない。
けど、いつまでも騒ぎ続ける訳にはいかない。
次の組み分けが始まる。

「ポッター・ハリー!」

あ、ハリーの番だ。

大広間は、有名人の登場にざわめくけど、ハリーが帽子を被った途端、すぐにその声も止んだ。ハリーならきっとグリフィンドールだ。だって英雄なんだもの。

組み分け帽子は、僕や他の人のように、素早くハリーの寮を決めなかった。五分くらいモゴモゴと何かを話し、皆がその光景に飽きかけてきた頃、漸く組み分け帽子は意を決した。

「スリザリン!!」

反対側の寮から、歓声が上がる。

僕達は困惑した。

ハリーがスリザリン？　そんなバカな！　だって、「例のあの人」も有名な闇の魔法使いもスリザリン出身なんだぞ？　何で英雄が、スリザリンなんかにーー

「ハリー……」

僕は、温かく迎え入れられるハリーを見つめる。

微笑みを浮かべ、けれど、目には一切の光を宿していない英雄。

その時僕が感じた感情はーー失望に他ならなかった。

1―4　お気に入り

フィオラ・レシューダｓｉｄｅ

ハリー・ポッターがスリザリンに入った。
その光景を目にした時、大半の生徒と教員は驚いたようだけど、私は大して特別な感情は湧き上がらなかった。
ーー嗚呼、まぁ、そうだよね。
という具合に、寧ろ納得した。
だって彼、きっとマグルに対する憎しみを持ってるもの。組み分け帽子がそこまで読めたかは分からないけど、ポッターの本質は、紛う事なくスリザリンよ。
環境は人を変える。
幾ら彼がジェームズ・ポッターとリリー・エバンズの息子だといっても、勇気に満ち溢れた正義感の塊になるとは限らない。そういう期待をすべきではない。
彼が元々どういう人間なのかなんて私は知らないけど、けど……ポッターはスリザリンで良い。

「セブルス、これから寮監として頑張ってね！」
「……ハァ」
隣に座っているセブルスの肩に手を置く。
とっくに晩餐は始まっているが、セブルスはあまり料理に手をつけていなかった。ふとスリザリンを見てみれば、ポッターが他の生徒に囲まれているのが見える。
うんうん、仲が良さそうで何よりね。
セブルスはきっと、ポッターを目の敵にする気満々だったろう。
何てったって、学生時代に自分をいじめていたジェームズ・ポッターに瓜二つだものね、ハリーは。目はリリーだけど。
本当あの四人組は……何度罰則しても全く懲りない。寧ろ私にまで悪戯してくるから、本当に困りものだった。

成長する内に、自分達がやってきた事がどんなに残酷で酷いものか、彼等は分かってきただろうけれど。
「フィオラ、貴女は確か、非常に強力な『全魔法薬無効化薬』を作ったそうですな」
「あら、聖マンゴ情報？」
「知り合いがいましてね」
そう言い、無言で私を見つめてくる。
「あー、はいはい。後でレシピあげるから」
「感謝します。……それと、この間新しい魔法薬を作ったのですが、それを見てもらいたいと思いましてな」
「了解。晩餐が終わったら部屋に行くね」
「はい」
セブルスは、彼の学生時代とても親しくしていた。
魔法薬が得意で、よく私の意見を聞きに来ていたわね……私は魔法史の教授だってのに。けど、魔法薬や闇の魔術に長けていた、とても優秀な生徒だったわ。私の『お気に入り』の一人。
あぁ、闇の魔術って言ってもね、それはあくまでも名称。悪い意味に捉えないで欲しいのよね。
だって、私の研究の産物には、闇の魔術だって多く存在する。
それは報告した際に「人を傷つける恐れがある」として魔法省に闇の魔法認定されただけで、私が意図して作った訳じゃない。要は使い方だ。
普通の魔法……例えば、一年生が始めに習う「浮遊呪文」。
あれで人を二十メートルくらい上まで浮かせて、そのまま魔法を解除すれば、その人間は地面に当たった衝撃で死ぬ。
「忘却術」も強力よね。あれ超怖い。
全ての記憶を忘れさせてしまえば、相手を無力化出来る。こちらに都合の良い記憶を植え付ければ味方にする事だって可能だ。
そう考えたら、全ての魔法が闇の魔術よね。悪用しようと思えば幾らでも出来る。
だから私は、そういった分類分けが馬鹿げてると思っているの。

まぁ、『死の呪文』や『磔の呪文』は別よ？
あれは悪意に満ちたものだもの。
『服従の呪文』は……あはは、あれは反省してる。
実を言うと、かなり前に動物を操るために作った魔法なんだけど、それが闇の魔法使いの連中に広まっちゃってね。
お陰様でこっちにも風評被害がありましたよ、ええ！
私が作った、って誰かがバラしやがって！
後少しでアズカバン行きだったんだから！　犯人、本当殺す！　いや、もう死んでるか……。

まぁ、そういう経緯もあって、私は闇の魔術って言い方が嫌い。
全てが全て、悪意を持って作られたって訳じゃないもの。

うん、関係ない事話しちゃったな。
私が言いたいのは、闇の魔術が得意＝闇の魔法使い、じゃないって事。じゃなきゃ、私なんてとっくの昔に豚箱行きよ？

「これから楽しみね、セブルス」
「そうですな。……色んな意味で」
「生徒をいじめちゃダメよ。ま、君が減点する分、私が加点するけど」
「本当にそういう所は変わっていませんな」
「褒め言葉ね。ありがと」
変わらないのは、良い事だ。
私は年を取らない。寿命もない。
だから私は、年老いた皆を変わらない姿のまま、受け入れる。
人と接するのは辛い事でもあるけれど、けれど、嫌いじゃないんだもの。

＊＊＊

「ポッター、スリザリンに入ったのね。おめでとう」

晩餐が終わると、私はセブルスについて行って、スリザリンの寮までやってきた。合言葉は『純血』らしい。随分と〝らしい〟わね。
私は寮監ではないから、夕食が終わったら自分の部屋に戻るべきなのだが、今からセブルスの部屋で新しい魔法薬を見なければならない。
セブルスが部屋割りの書かれた紙を自室に取りに行っている間に、私は生徒に混じって寮の中に入り込んだ。
見た目は十七歳だもの。
黒いローブを着ていれば、生徒とそう区別はつかない。
「あっ、ありがとうございます。フィオ……えーっと、レシューダ先生」
「フィオラで良いのに。まぁ、好きに呼んでくれて構わないわ」
「先生はどうして此処に？」
皆、私とハリーを交互に見ながらヒソヒソ話をしている。
そんな中、プラチナブロンドの少年が、ハリーの横に立っているのが見えた。何処か、かつての教え子に似ている気がする。
すると私の視線に気がついたのか、彼は自己紹介をした。
「僕はドラコ・マルフォイです。先生」
「あら、ルシウス・マルフォイの息子？　彼も私の教え子なんだけど……結局、ナルシッサと結婚したのかしら」
「はい。僕の父上と母上です」
「彼等は学生時代から優秀な上、仲が良かったもの。そう……結婚したのね。良かったわ。今更だけど、おめでとうって伝えておいてね」
「ありがとうございます。伝えておきます」
堅い口調ではあるものの、両親を褒められた事が嬉しかったのか、少しだけ笑っている。
それから適当に近くのスリザリンの新入生に声をかけていると、こんな事を聞かれた。
「先生は何処の寮だったんですか？」
聖２８一族の一つであるグリーングラス家の長女、ダフネ・グリーングラスがそう聞いてきた。

あぁ、時々聞かれるんだけど……
「私、ホグワーツの生徒ではないの。此処が出来るずっと前に生まれて……けど、ホグワーツの創立には立ち会ったわ」
「って事は、サラザール・スリザリンにも会ったんですか?!」
「ええ、仲が良かったわよ」
ーーあっ、まずった。
その途端、沢山の生徒からの質問が飛んできた。
スリザリンがどんな人物だったのか、どんな事が好きだったのか、どんな事を話したのか。……まぁ、皆、スリザリンを尊敬しているだろうから、気になるのは分かる。
そして歴史をこの身で生きてきたからには、私にはそれを教える義務がある。そういう訳で、私は快く口を開いたがーー

「フィオラ、新入生の落ち着きを乱さないでいただきたいですな」
「あ、セブルス」
どうやら戻ってきたらしい。
その眉間にはシワが寄っている。
「いやぁ、ごめんね皆。いつでも聞きに来て良いからさ、また後でね」
あら、聞き分けの良い子達。
皆残念そうにしてはいるものの、私の言葉を聞き入れてくれた。
そして二人してセブルスの部屋で。
寮から出る前に、悪戯心で腕を組んでやったら、思い切り頭を叩かれた。リリーが好きなのは分かるが、年上に暴力を振るうのはいただけないな。
これでもお婆ちゃんなんだから。

＊＊＊

翌朝。
私は睡眠を必要としないので何も体調不良はなかったが、セブルスは寝不足のように見えた。そりゃあ、昨夜は三時くらいまでずっと話

し込んでいたものね。
寝ても良いのよ、と言っても、もう少しだけ、と言って利かなかった。彼は私と違って人間なのだから、睡眠は必要だ。いつもより、更に土気色になっちゃうぞ。
私は近くに座っていた生徒に挨拶をすると、自分の教職員テーブルに着いた。
今日は授業初日。
新入生にとっては緊張の一日になるだろう。けど私の授業は、歴代でも結構稀なものでね。
今朝の教職員テーブルには、ミネルバとセブルス、ポモーナそしてクィリナスがいた。
いやはや、目新しい教え子がいるのは嬉しいものだね。
クィリナスも私の授業を真面目に聞いてくれる子だった。今までは『マグル学』を教えていたんだけど、ちょっと旅に出て……戻ってきたら何か知らないけどターバン巻き始めてたわね。まぁ、人のプライベートには顔を突っ込まないタチだから聞かないけどさ。
何でも、アルバニアで吸血鬼にあったんだって。通りでニンニクの匂いがする訳よ。
「クィリナス、元気なさそうね」
「あ、こ、こ、これは……レシューダ先生……おは、ようございます」
「アハハ、君、そんなに吃ってたっけ？　まぁ、疲れてるなら言ってよ。『元気爆発薬』くらいならすぐに煎じてあげるから」
「お、こ、心遣い……か、感謝、します」
「どういたしまして」
そう、セブルス越しに声をかける。
彼は別に『お気に入り』って訳ではなかったけど、同じ教員の好で親しくしているつもりだ。そうじゃなきゃクィリナスなんて呼ばない。
何か嫌な気配を感じるし。
教師としてあるまじき事だとは思うけれど、私にとって、私の「『お

気に入り』と一般生徒の格差」は非常に大きい。
トムもセブルスも、私の『お気に入り』の中の一人だ。近頃はポッターもお気に入り候補に挙がっている。これから精進してもらいたい。
私は彼等に退屈を解してもらっている。
そのお返しとして、私は彼等が困っていれば助けるのだ。勿論、その時の私の感情や気分によって、それは左右するけれども。
長い人生送ってると、皆に皆、優しい人間ではいられなくなる。
私は人と接する中で、人間の醜さや悲しさ、そして残酷さを知ったから。だから私は、全ての人間に平等に接する事なんて出来ない。私はとっくに、この世界には幻滅している。
だから教師なんてものになったのかもしれない。

「今日は初授業ね……セブルスは、一年生に何を教えるつもり？」
「『おできを治す薬』。あれならトロールでも作れますからな」
「まぁまぁ、優しくしてあげなさいね」
大広間を見渡しながら、私はゴブレットに入った水を口にした。
さて、今年の新入生の中に、私の『お気に入り』になりうる人物はいるかしら。

1―5　授業

ハーマイオニー・グレンジャーｓｉｄｅ

魔法なんていう訳の分からない力には、今まで縁がなかった。ただ創作の本の中だけで触れる機会のある幻想。それが魔法。

私は物心ついた頃から勉強が好きで、非常にリアリストだった。

七歳くらいになった時には、誰がクリスマスに毎年プレゼントをくれるのかなんて察していたし、小説も読まなくなっていた。魔法なんてありえない。そう思っていた。

ホグワーツから手紙が来るまでは。

それからはあっという間だった。

私は今までに学んできた知識を放って、得体の知れない場所に行く事に不安を感じたけれど、家にやってきたマクゴナガル先生は、とても優しかった。

彼女は私に魔法界の事を事細かく教えてくれて、私の質問にもきちんと答えてくれた。魔法だって見せてくれた。両親も驚いていたけれど、私に「好きな道を選んで良い」と、優しく声をかけてくれた。

ーー私は嬉しかった。

魔法という名の、今まで知らなかった力。

それが私にある。

まだ子供である私に大きな夢を見させるには、十分過ぎる程の要素があった。お陰でホグワーツを卒業したらどうするのか、なんて考えずに入学しちゃったし、マグル界の知り合いとも連絡が取れない。

けど、私はそれでも良かった。

友人と呼べる人間なんて、今までに誰一人として、私の周囲にはいなかったから。

私はいつも独りだった。

原因は分かってる。私のこの嫌な性格だ。

自慢じゃないが、元々私は賢かった。少しの勉強で学年トップの成績も取ったし、人に教える事も得意だった。でも当時の私は、それが当たり前の事だと思っていたの。
自分には簡単な事なのに、何で貴方は出来ないの？
そう思って、周りを無意識に見下していた。
それからは、本が親友。
周りが私の悪口を言うなら、勉強で見返してやる。そう思った。
だって将来役に立つのは、腕っ節じゃなくて頭の良さーー学歴だもの。
だから私は、ただひたすらに勉学に励んだ。
楽しかったってのもある。けど、それ以上に、あいつ等を見返してやりたかった。

ホグワーツに入学する事になり、私の人間関係は0からやり直しとなった。
つまり、この場所には、私のこの捻じ曲がった性格を知る人間は、誰一人としていない訳だ。けど、いつこの性格が露見して、また以前のように孤立するか分からない。
だから出来るだけ、親切に接しなきゃ。
今までずっと独りだったけど、友達が欲しくないといえば、それは嘘になる。
両親は独りぼっちの私を、いつも心配していた。
気を使って学校の話はしなかったけど、それでもきっと、娘が辛い思いをしているとでも思っていたのだろう。
もう心配はかけたくないーーだから私は、ホグワーツで友達を作って、両親を安心させるんだ。

「なるほど、君はどうやら、競争心の高い子のようだ。……同じ気質を持った人間が多い方が、君はきっと偉大になれる」
組み分け帽子は、私の頭の中でそっと呟く。
私は、自分と同じレベルの人間がいる場所に生きたい。そうすれば

きっと、人を見下して、嫌な事を言ってしまうなんて事はなくなるはずだ。だってそういう所には、私より上の人間が、必ずいるんだもの。

「よろしい。ならばーーレイブンクロー!!」

英知を司るレイブンクロー。

私は此処で、上手くやっていけるだろうか。

＊＊＊

同室のパドマ・パチルと仲良くなった。

私はあまり社交的な性格ではないので自分から話しかけられなかった所、彼女が会話の輪に入れてくれたのだ。

組み分け帽子は言っていた。「レイブンクローに入れば、機知と学びの友を得る」って。私にとってのそんな友人が、この寮で見つかったら良いな。

一日目の授業は、パドマと一緒に行動を共にする事にした。

ホグワーツの大半の生徒が、友人と二、三人で固まって動いており、基本的に一人の生徒は見かけない。友人がいなければ、悪目立ちする事間違いない。

私が一番楽しみにしていた授業が、「魔法史」。

魔法界の歴史を学ぶ授業らしい。先輩方曰く、この授業は非常に有意義な時間を過ごせるんだとか。

理由を聞いてみると、教師があの「不死者」フィオラ・レシューダであるという。大広間の教職員テーブルで若い女性を見かけたけど、もしかしてあの綺麗な人がフィオラ・レシューダだったのかしら。

彼女は二千年以上前から生きているため、歴史を生で見ているらしい。実際に当時生きていた人間の話を聞くなんて、近代史程度でないと有り得ない事だ。少なくとも、マグルの世界では。

だから私は、楽しみで仕方がなかった。

ホグワーツ初日の午後。
私は意気揚々と魔法史の教室へ向かった。そこは黒板と机、椅子があるだけの簡素な部屋だ。実技をするような科目ではないので、当然の光景とも言える。
私とパドマは、かなり早く着いてしまったようだ。まだ生徒が少ない。「魔法史」はグリフィンドールと合同のようだ。
すると黒板の近くにいた、青みがかった黒髪を持った綺麗な人が、私達に笑みを向けてくる。
「こんにちは」
その表情からは、老いなんて欠片も感じられない。
嗚呼、この人は本当に不老不死なんだ。
生徒が集まり、チャイムが鳴ると、早速楽しみにしていた授業が始まる。
「新入生の皆、初めまして。今日から皆に魔法史を教える、フィオラ・レシューダよ。俗に『不死者』なんて呼び方もされてるけど、好きに呼んでくれて構わないわ」
魔法界の生まれならば、彼女の名を知らない者はいないだろう。
ダンブルドアと同様、偉大な魔女として様々な本に名を連ね、沢山の功績を残している。マグル生まれの私でさえも知っている人だ。
すると、彼女は再び話し始める。
「私はね、二千年以上生きてきたわ。つまり、そこの教科書に書いてある事は、全部この目で見てるって事」
そう言うと、先生は私の目の前に置かれていた本を指差した。
教科書は……要らないの？
でも、そんなんじゃ授業が成り立たないんじゃないかしら。
「マグル界の歴史も知っているわ。興味があったら聞きにきなさい。気分が良かったら教えてあげる」
その言葉に、思わず皆苦笑を浮かべる。
けど、マグル界の歴史も知ってるなんて凄い！　後で色々と聞きに行かないと！　知りたい事が山ほどあるの！

「実体験した人間の話は貴重よ。……　けど、正直言って、魔法史はそれ程役に立つとは思えないわ。専門の、特殊な職業に就きたい訳じゃなかったら、ざっと覚えるだけで十分よ。だから、授業中は好きにして構わないわ。ただし、学年末のテストはきちんと行います。そこで点数を取らなければ落第もあるから、そこはきちんと考えなさい」

教室がざわめく。

今まで、授業を受けてきたけど、こんな事を言ってきた先生はいなかった。皆厳しくて、特にマクゴナガル先生なんて「変身術を嘗めるようだったら教室から叩き出す」とまで言っていたのに……。

「私の話を聞きたい人はそうして。他は、魔法の練習をするなり、勉強をするなり、居眠りをするなり……兎に角、授業を受けている人間の邪魔にならないのなら、何をしても良いわ。ほら、教科書を読むのって、退屈じゃない？」

一理ある。

確かに歴史は、将来の職業選択において、マグル界でもそれ程重要ではない。歴史研究家になる、なんていうのならば話は別だろうが、そんな職業、魔法界にあるのかさえ疑わしい。

それに、確かに教科書は読んで覚えれば済む。

きっと先生の話を聞けば、教科書以上の事が学べるはずだ。

「今日は手始めに、〝魔法の起源〟について教えてあげる。まだ最初の授業だしね。勿論、教科書に沿ってはするわよ？　進行は遅くなるけど。必須事項は自分で覚えなさい。学年末テストは勿論するわ。私が教えられるのは、追加要項と歴史の真実。あぁ、他科目で宿題で分からない所があったら、後で持ってきて良いわよ。教えてあげる。どうせ二十分も話さないし。……じゃあ、私の授業を受ける人間だけ前に来て」

戸惑いながらも、次々と生徒は動き出す。

勿論私は真ん前だ。パドマを引っ張って、私はすぐさまレシューダ先生の目の前に座った。レイブンクロー生は、我先にと前の方の席へ移動する。グリフィンドールは疎らだ。

本格的に授業が始まった。
レシューダ先生は、事細かに魔法の起源について話し始めた。今までに知らない知識ばかりなので、私達は慌ててノートを取る。けれど先生はゆっくりと話してくれるので、心に余裕を持って話しを聞く事が出来た。

「……　と、古来の魔法は杖無しで行われていたわ」
「先生は杖無し魔法が使えるんですか？」
レイブンクローの男子生徒が、手を挙げて質問をしてくる。
「使えない事もない。……　けれど、やはり威力は落ちるわ。貴方達も練習すれば使えるわよ」
そもそも、〝杖は魔力を具現化しやすくするものである〟、と本で読んだ事がある。
魔法を使う時はイメージが大切なのだが、杖無しともなるとその力が更に必要となる。余程想像力が豊かでないと使えないーーって。
「流石に、杖誕生の瞬間には立ち会えなかったわ。私のこの杖はーー」

すると先生は、徐に自分の杖を取り出した。
真っ白な杖。
シンプルで、何の彫刻もない。
「白樺に不死鳥の羽。自作よ。四代目オリバンダーに手伝ってもらったの。特に深い意味はないわ。貴方達も、オリバンダーの店で杖を買ったでしょう？　あれは、本当に歴史のある店よ」
それから適当に雑談を聞いていると、本当に二十分で先生の講座は終わった。
後は授業のチャイムが鳴るまで好きにして良いと言われたので、私は先生に質問をしに行く。けれど、私と同じ考えのレイブンクロー生は多かったようで、

「先生！　杖無し魔法が見てみたいです！」
「先生！　まだ魔法が発展していない時代に、どうやって不死になっ

たんですか！」
「先生！　ホグワーツの創設者と会った事は！」
勿論、どれも聞きたいものばかりだったので、私は先生の回答を待った。
レシューダ先生は、時間の許す限り一つ一つ丁寧に教えてくれた。ただ「不老不死」の力については濁されてしまった。けれど、私はどうしても、その方法に興味があった。何故だかは分からない。けれど、ダンブルドアのような優秀な魔法使いでも為す事の出来ない魔法に、私は惹かれたのだ。
「へぇ、君、グレンジャーだっけ？　……不老不死に興味があるの？」
「はい！　まぁ、あくまでも、興味の範囲ですけど……」
レシューダ先生は少しだけ悲しそうな顔をすると、小さな声でこう答えた。
「それが良いわ。あくまでもこういった魔法は、興味程度で済ませる方が良いの。後から絶対……後悔するもの」
ーー先生はもしかして、不老不死になった事を悔やんでいるのかしら。

結局私達の質問タイムは、授業の終わりにまで続いた。
グリフィンドール生は途中で飽きて、教室の後ろで魔法の練習を始めたけど、こんな貴重な話を聞かないなんて信じられない！　こんな話、本を読むだけじゃ絶対に知る事なんて出来ないわよ！
ーーあ、チャイムが鳴った。
すると先生はすぐに「はい、授業終わりー。帰って良いわよー」と、さも当然のように言う。え？　何で？
「先生、宿題は？」
私が言うと、教室中がギクリとしたように感じた。ただでさえ初日の宿題は多いからか、これ以上増やされたくないとでも思っているの

かもしれない。
　でも、宿題って大事だと私は思うの。勿論、自分で勉強もするわよ？　それでも、プラスして調べようと思えるし、それを評価もしてもらえる。私にとって宿題というものは、自分を高めるための必須要項でもあるのだ。
　すると私達にとっては意外な事に、レシューダ先生はこう答えた。
「チェックするのが面倒だから、別に良いんだけど……そうね、じゃあ、自分の興味がある歴史上の事件のレポートを好きに書いてきなさい。マグル界でも魔法界でも可。提出は自由。今後も宿題が欲しかったら、私に直接言いに来なさい」
　歴史って……マグル界でも良いの？
　でも、折角だから魔法界の歴史を調べようっと……教科書は覚えたけど、パドマにも色々教えてもらわなきゃ。やっぱり、教科書や本に載っていない事もあると思うの。
　それにしても、提出は自由なんだ……。
「０から１０段階で評価して、それに準じて寮に点数も上げるから……まぁ、余裕がある人はやってくると良いわ」
　その言葉に、レイブンクロー生全員が心の仲でガッツポーズをする。
　レイブンクローに入って最初に、先輩方にこんな事を言われた。
「先生方から与えられる点数は、年の最後に表彰される寮杯の結果を左右する。今年こそは絶対に寮杯を獲得したいから、皆頑張ってね！」
　過去数年間、ずっとスリザリンが寮杯を獲得しているそうだ。先輩方は、スリザリンに一泡吹かせたいみたい。けど、それは他寮からも感じられる。
　スリザリンはどうやら、随分な嫌われ者のようだ。聞いてみると、マグルやマグル生まれの人間を蔑み、純血こそが骨頂だと思ってるんだって。
　何だか嫌ね。私マグル生まれだし。スリザリンに組み分けされなくて良かった。

レイブンクロー生は、先生の言葉に顔を見合わせた。
小さくても、レポートを出せば寮杯に貢献出来るのだ。それに、全員で耳を揃えて出せば、かなりの高得点が貰えるだろう。
私はパドマと魔法界の歴史の話をしながら、一日を過ごした。

＊＊＊

「貴女達は、レシューダ先生の『お気に入り』になれるかな？」
談話室で宿題をしていると、先輩が話しかけてきた。
確かこの人はーーペネロピー・クリアウォーター先輩だ。パドマは仲が良いようで、親しげに挨拶をしていた。
まず初めに聞かれたのがレシューダ先生の授業の事で、「良い授業だったでしょ」とまるで自分の事のように言っていた。そんなにレシューダ先生の事が好きなんだ……けど、確かに先輩方の言う通り、良い授業だった。
そして、冒頭の言葉に戻る。

『お気に入り』……？
一体何の話だろう。
「レシューダ先生はね、スネイプ先生と違って、皆に良く接してくれるの。でも、学年に一人くらい『お気に入り』の生徒がいて、その人には特別に贔屓するって言うか……扱いが手厚いのよね。噂だと、個人授業もしてくれるみたい」
「へぇ……どういう人が『お気に入り』なんですか？」
私は興味を覚えた。
あんなに素晴らしい魔女から個人授業を受けられるの？　何それ……最高じゃない！
それに、先生ってきっと、魔法以外にも精通してるわよね？　ほら、授業中に宿題も教えていたし。って事は、興味のある内容を、沢山教えてもらえるんじゃない！

「うーん、基準は分からない。だって、ウィーズリーの双子も先生の『お気に入り』みたいなの。必ずしも真面目な生徒って訳じゃないみたい」

他にも、今この学校にいる先生の『お気に入り』を教えて貰った。

先生が公言している訳でもないので、絶対にとは言えないようだが、あくまでも噂の範囲内の『お気に入り』が、五人くらいいるんだって。まぁ、私からしてみれば知らない名前ばっかりなんだけどね。

でも、誰にも共通点がないみたいなの。

優秀な成績を収めていない、不真面目な生徒でも数少ない『お気に入り』の一人になれるなんて……今度聞いてみようかしら。

「後、スネイプ先生も『お気に入り』だったんだって」

「レシューダ先生って、何年この学校にいるんだろう」

やっぱり、不死者は私達の物差しで計っちゃダメなのね……。

そう心の中で呟くと、私は宿題に目を落とした。

さて、満点目指して頑張らなくちゃ!!